

課題 No.	課題名	研究 期間	研究概要 （目的・計画・予想される成果）	主な所見・指摘事項等	指摘事項等に対する対応	検討 結果
				(ア)研究の必要性や重要性 (イ)研究計画の妥当性 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他		
1	千葉県農業を支える次世代品種の育成及び定着支援技術の開発	令和 9 ～ 13 年度	【目的】 「千葉県における育種目標（耕種部門）」に定められた、水稻、落花生、イチゴ、食用ナバナ、ニホンナシ、ビワ、イチジク、イヌマキ、カラーについて、本県の気象・土壌条件に適し、高収量、高品質、病虫害や気候変動の影響を受けにくい等の優良な特性をもつ品種を育成する。また、DNA解析技術や形質評価技術の開発と活用により、品種改良の精度を高めるとともに、早期の品種育成を目指す。さらに、育成品種の普及を支援するため、品種に適した栽培技術等の開発を行う。 【計画・予想される成果】 ○水稻の育種について 地球温暖化などの環境変化に対応し、安定生産を可能にするおいしい品種の育成に取り組んでおり、早生及び晩生～極晩生品種の開発を進めている。育種には交配から品種登録まで長い年月が必要なことから、世代促進温室の活用や、遺伝子診断で選抜の精度の向上を図り、育種の効率化に取り組んでいる。また、米飯品質評価技術の確立も図っている。県の取組を説明し、有望系統の特性等について紹介した。 ○イチゴの育種について 日持ちが良く、おいしいもの、市場出荷や輸出にも向く品種の育成に取り組んでいる。データ駆動型育種で育成した系統を活用し、効率的な育成を行っているほか、将来的な流通も見据え、品質管理技術の開発などを行っている。現在、早生等の有望系統を選抜していること等、現在の取り組み状況について説明した。	（全体） (ウ)提示されたすべての育種目標を持つ完璧な品種があるとよいが、大変だと思うので、何か良い特徴があれば品種にして良いと思う。生産者の栽培管理上の工夫でカバーできる場合もあるので、特徴の明確な品種の育成に期待したい。 (エ)県の品種育成において、生産者や実需者の意見はどう反映しているか。 (イ)育種の早い段階から生産者や関係者の評価を受けることも面白い取組と考える。 （水稻） (ア)水稻では、高温耐性、作りやすさ、収量性を生産者は重視する。また、玄米外観品質も重要となる。これらの特性を備えた新品種の育成は現場のニーズに合致しており、今後に期待したい。 (イ) 水稻では、品種育成の効率化ということでは、DNAマーカーを活用して品質評価と組み合わせることで総合的に系統を選ぼうとしており、先進的な印象を受けた。 (ウ)水稻品種「粒すけ」がそれほど普及しないのはなぜか。 （イチゴ） (ア)イチゴでは、前に品種が出てから時間が経っている。他県や民間で色々な品種が出てきている中で、千葉県の新品種もかなり待望されている。市場出荷向けという育種の方向性も評価でき、今後に期待したい。	（全体） (ウ)有望な系統ができれば、現地試験を行い、評価を聞きながら進めていきたいので、協力をお願いしたい。 (エ)5年に1度程度の頻度で、育種目標を見直しており、その際には生産者・実需者の意見を確認し、反映している。また、品種登録の前に現地試験を行い、生産者や実需者等の評価を受けている。 (イ)意見を参考に今後取り組んでいく。 （水稻） (ア)生産者のニーズに対応した特性を持った水稻品種の育成を目指している。 (イ)従前の品質評価に加えて、高温耐性に対するDNAマーカーを活用して効率的な育種を行うよう試みている。 (ウ)熟期がコシヒカリと同時期の品種であり、また、品種の変更は生産者判断となる。これまで栽培技術の改善を図ってきた結果、昨年米の食味ランキングで特Aを取得した。今後も普及拡大に努めていきたい。 （イチゴ） (ア)イチゴ、水稻とも有望系統が出てきており、なるべく早く育成、普及できるよう今後も取り組む。	4

検討結果は事務局が基準に従い以下の番号を入れる。
5: 独創性・貢献度等が高く、是非課題化した方がよい
4: 課題化した方がよい
3: 部分的に検討する必要がある
2: 大幅に見直す必要がある
1: 課題化する必要はない

様式 8 （中間・公表）

令和 8 年度 試験研究課題検討結果票（中間）

課題 No.	課題名	研究 期 間	研究概要 （目的・計画・成果）	主な所見・指摘事項等	指摘事項等に対する対応	検討 結 果
				(ア)研究計画の妥当性 (イ)研究成果の達成度 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他		
2	持続可能な農業生産を実現する環境負荷軽減技術の開発と技術導入	令和 6 年 10 年度	【目的】 生産現場では気候変動に伴う気象災害や新たな病害虫・雑草の発生、地力の低下といった問題が深刻になっている。また、「みどりの食料システム戦略」では、温室効果ガスの排出削減、化学農薬・化学肥料の削減と有機農業の面積拡大が掲げられているが、これまでに開発された環境負荷低減技術は、生産性の低下を招くとの懸念から普及は十分に進んでいない。本プロジェクトでは、水稻、ニンジン、ネギ及びイチゴを対象に、これまでの収益性を維持しながら「みどりの食料システム戦略」を想定した環境負荷低減と作業の軽労化または省力化の両方を実現する技術を開発し、実証を行っている。 【成果の概要】 ○化学農薬、化学肥料の低減技術について 気候変動への対応や、「みどりの食料システム戦略」を実現するための化学農薬、化学肥料低減技術の開発について紹介した。化学農薬低減では、総合防除に基づく秋冬ネギ栽培として、土着天敵の活用や、圃場周辺の植生管理を検討。化学肥料の低減では、スマートフォンを活用したアプリ構築などを紹介した。 ○有機栽培の面積拡大の取り組みについて イチゴ、露地野菜を対象に有機栽培の体系化に取り組んでいる。今後、ニンジンの有機栽培のマニュアル作成を予定しており、その構成や作成方針について意見交換を行った。	(イ)栽培技術では除草が課題で、これという解決策がない。また、アブラナ科野菜ではヨトウムシ等の害虫防除が課題だが、防虫ネットは管理が煩雑である。慣行農業でも取り組める技術であると良い。最新技術の検証やコスト計算など、個々の生産者では実施が困難な事項について研究機関で取り組むことを期待したい。 (ウ)有機農業は特別なのではなく、慣行からの発展形と捉え、代替技術を紹介することで広がりが出てくるだろう。販売も同様に市場流通を基準として、必要なことを取り入れていくことが重要で、その方が広く消費者に受け入れられるだろう。 (ウ)有機農業のコストは除草が大きいため、経営コストを示して価格交渉できる可能性はある。 (ウ)マニュアルは有機農業のものでなく、慣行栽培の基礎技術をベースに、代替技術として紹介する方が望ましい。土づくりに悩む生産者は多いため、事例紹介も重要と考える。 (ウ)有機栽培は新規参入者も多い。技術ベースがないので、共通技術がマニュアルにあると良いだろう。	(イ)他県では雑草を活用した草生管理をして、土着天敵を活かすということが実証されている。千葉県の有機農業のやり方もあるが、事例紹介や他地域の技術検証も考えたい。 (ウ)意見を参考に、市場の出荷基準に準じた有機農産物を栽培できるようなマニュアル作成を進める。 (ウ)経営事例調査や場内試験結果から除草に関するコストをマニュアル中に示していきたい。 (ウ)マニュアルでは、有機・慣行問わずポイントを紹介しつつ、有機栽培に特有の技術を掲載したい。また、研究成果だけでなく現地事例も掲載していきたい。 (ウ)意見を参考に、他の研究成果を引用しながら、土づくりなどの共通技術を入れていきたい。	4

検討結果は以下の番号を記入。
5: 独創性・貢献度等が高く、是非継続した方が良い
4: 継続した方が良い
3: 部分的に検討する必要がある
2: 大幅に見直しする必要がある
1: 中止すべきである